

2018年の干支は戌戌(つちのえ・いぬ)！  
株高が続くのか悩ましい局面だが、NISA等で長期積立投資  
が良い投資方法となるかもしれない。

商品企画部 松尾 健治  
窪田 真美

※三菱UFJ国際投信がお届けする、日本版ISAに関する情報を発信するコラムです。

## 2018年の十二支は「戌(いぬ)」で「笑い(上昇)」の年

年年未年始近く、この時期になると、「干支(えと)」の話(記事)がたくさん出てくる。2017年12月5日付日経 QUICK ニュースは「今年の東京株式市場は、日経平均株価が四半世紀ぶりの高値に急上昇し、「申(さる)酉騒ぐ」の格言通りの展開となった。18年は戌(いぬ)年。「戌笑う」になれば、来年も相場の上昇が続く見通しだ。」、「過去の戌年相場は4勝1敗(バブル崩壊後も2連勝中)」(2017年12月8日付日本証券新聞～URLは後述[参考ホームページ]①)と報じていた。また、2017年12月19日付週刊エコノミストは、「戌の『ツチ』は五支の真ん中で、季節の変わり目にあたり、物事が別のものになる転換点を示す。干支の観点からは、明暗が分かれやすい年になる。」と報道している(URLは後述[参考ホームページ]②)。



ほかに、干支ではないが、2018年の世界市場見通しについて「2018年はボラティリティー上昇、株式リターン損なう恐れ」と言及したのが、世界最大の投信会社の米バンガードで、「来年の世界株式・債券がここ10年で最も低調なパフォーマンスになると予測。米株式相場のリターンは3-5%、米国以外の株式相場のリターンは5.5-7.5%になる」としていた(2017年12月5日付ブルームバーグ～URLは後述[参考ホームページ]③)。

「干支」の「十二支(じゅうにし)」は下記の通り、「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥」の順番で続き、2018年は「戌」、動物では「犬」、読みでは「ジュツ、いぬ」となる。

干支の十二支 ... 2017年 ... 2018年

十二支							
西暦	和暦	十二支	動物	音読み	訓読み	意味	意味(より平易にしたもの)
2008年	平成20年	子	鼠	シ	ね(ずみ)	繁栄	上昇
2009年	平成21年	丑	牛	チュウ	うし	つまずき	下落
2010年	平成22年	寅	虎	イン	とら	千里を走り	大きく上昇
2011年	平成23年	卯	兎	ボウ	う	跳ねる	上昇
2012年	平成24年	辰	竜	シン	たつ	天井	株価が天井つまり高値
2013年	平成25年	巳	蛇	シ	み	天井	株価が天井つまり高値
2014年	平成26年	午	馬	ゴ	うま	尻下がり	下落
2015年	平成27年	未	羊	ビ	ひつじ	辛抱	我慢
2016年	平成28年	申	猿	シン	さる	騒ぐ	乱高下
2017年	平成29年	酉	鶏	ユウ	とり	騒ぐ	乱高下
2018年	平成30年	戌	犬	ジュツ	いぬ	笑い	上昇
2019年	平成31年	亥	猪	ガイ	い	固まる	値固(ねがた)め

(出所：国立国会図書館などより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

十二支の相場格言は、今年2017年が「酉(とり)騒ぐ」で、来年2018年が「戌(いぬ)笑い」、再来年2019年が「亥(い)固まる」となる。十二支の相場格言とは、「辰巳(たつみ)天井、午(うま)尻下がり、未(ひつじ)辛抱、申酉(さるとり)騒ぐ、戌(いぬ)笑い、亥(い)固まる、子(ねずみ)は繁栄、丑(うし)つまずき、寅(とら)千里を走り、卯(うさぎ)は跳ねる」。

平易に言うと、「辰(たつ)年と巳(み)年には株価が天井つまり高値を付け、午(うま)年は下落で、未(ひつじ)年は我慢、申(さる)年と酉(とり)年は乱高下し、戌(いぬ)年は上昇、亥(い)年は値固(ねがた)め、子(ね)年はさらに上昇、丑(うし)年は下落、寅(とら)年は大きく上昇、卯(うさぎ)年も上昇。」となる。

## 2018年の干支(十干十二支)は「戊戌(つちのえ・いぬ)」

「干支」は前頁の「十二支(じゅうにし)」で呼ばれることが多いものの、正確には「十干(じっかん)」との組み合わせにより、「十干十二支」と言うものである。「十干」は陰陽五行(いんようごぎょう)説に基づき「木、火、土、金、水」の五行に各々、兄(え)/陽と弟(と)/陰をあてて「甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸」としたもので、冒頭記事の2017年12月19日付週刊エコノミストが「戊の『ツチ』」と述べていたもので、2018年の十干は「戊(つちのえ)」である。2018年の十二支が「戌(いぬ)」なので、2018年の干支(十干十二支)は「戊戌(つちのえ・いぬ)」となる。

干支の十干	...2017年			...2018年		
	兄(え)/陽			弟(と)/陰		
陰陽五行説	西暦	和暦	十干	西暦	和暦	十干
木(き)	2014年	平成26年	甲(きのえ)	2015年	平成27年	乙(きのと)
火(ひ)	2016年	平成28年	丙(ひのえ)	2017年	平成29年	丁(ひのと)
土(つち)	2018年	平成30年	戊(つちのえ)	2019年	平成31年	己(つちのと)
金(か)	2010年	平成22年	庚(かのえ)	2011年	平成23年	辛(かのと)
水(みず)	2012年	平成24年	壬(みずのえ)	2013年	平成25年	癸(みずのと)

(出所：国立国会図書館などより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

冒頭の報道で見られた通り、十二支と日本株との関係で語られる事が多いが、今回のコラムでは十二支だけではなく、十干についても見る。さらに日本株だけでなく米国株も加え、米ドル、金、そして日本の国内公募株式投信との関係を見る。日本株も国内公募株式投信もNISA(少額投資非課税制度)で利用される事が多く、NISA投資家にとっても参考となる情報と思われる。

## 2018年と同じ十干、十二支は日米株高で翌年も上昇相場、2018年と同じ干支(1958年)は日米株大幅高!

まず、日米株式である。次頁の左グラフが十干、次頁の右グラフが十二支、2017年が破線の四角い枠、2018年が実線の四角い枠で囲んである(2017年は12月11日現在、以下同じ)。

日米株式の2018年の干支は、十干でも十二支でも同様の結果となった。十干の「戊(つちのえ)」、十二支の「戌(いぬ)」ともに、平均的に日本株高、米国株高、翌年も上昇していた。十干でみると、2017年の「丁(ひのと)」に株安だったが、2018年の「戊」は株高に転換、東証株価指数(TOPIX)の年間騰落率が平均+13.4%と十干の中で3番目の株高だった。2019年の「己(つちのと)」は+26.1%と、十干の中で最大の上昇相場となっていた。冒頭の記事にあった「戊の『ツチ』は五支の真ん中で、季節の変わり目にあたり、物事が別のものになる転換点を示す。」の通りになっている。

一方、十二支では「戌(いぬ)」は平均+7.7%と十二支の中で7番目の日本株高で、翌年2019年の「亥(い)」は+15.7%、翌々年2020年の「子(ね)」は+22.8%と上昇相場で加速している。

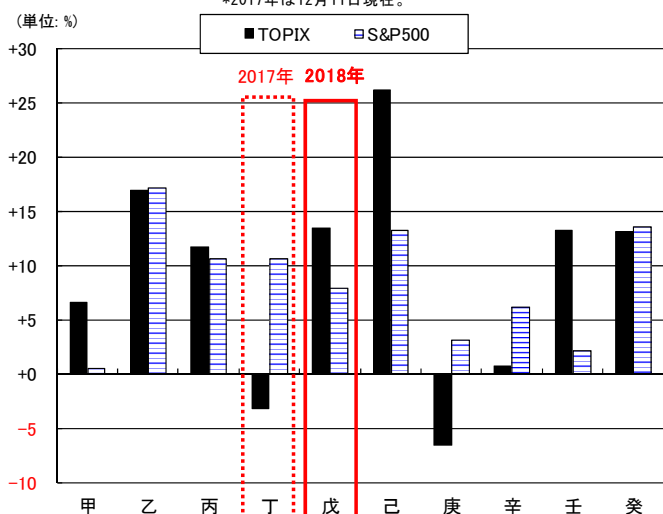
前回の「戊戌(つちのえ・いぬ)」は60年前の1958年だが、TOPIXは前年比+40.7%と上昇している。1958年と言えば、岩戸景気が始まり、5月22日の第28回衆議院議員総選挙で76.99%という過去最高の投票率を記録、

10月に東京タワーが竣工した年である。

米国株をみると、十干で、2018年の「戌(つちのえ)」、翌年「己(つちのと)」と、日本株同様、株高である。十二支でも、2018年の「戌(いぬ)」、翌年「亥(い)」と同じく連続して上昇相場となっている。

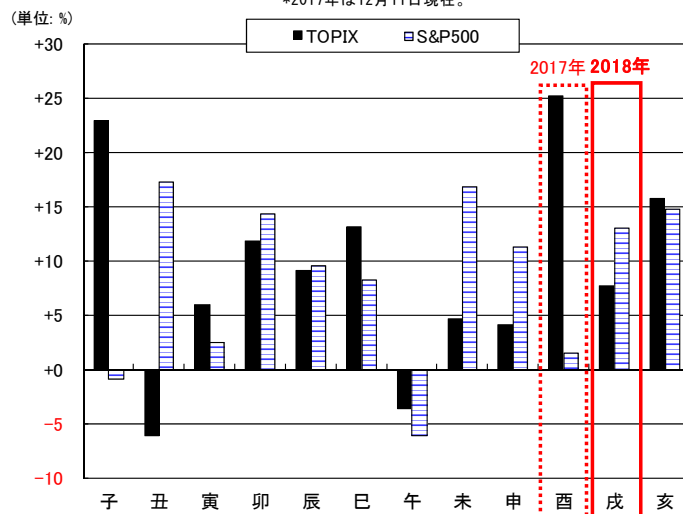
十干でも十二支でも、翌年にかけて上昇相場が続くのであれば、2018年は早々、NISA等で長期積立投資を行っていくのが良い投資方法となるかもしれない。

十干と日米の株式年間騰落率の過去6回平均  
\*2017年は12月11日現在。



(出所:ブルームバーグより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

十二支と日米の株式年間騰落率の過去5回平均  
\*2017年は12月11日現在。

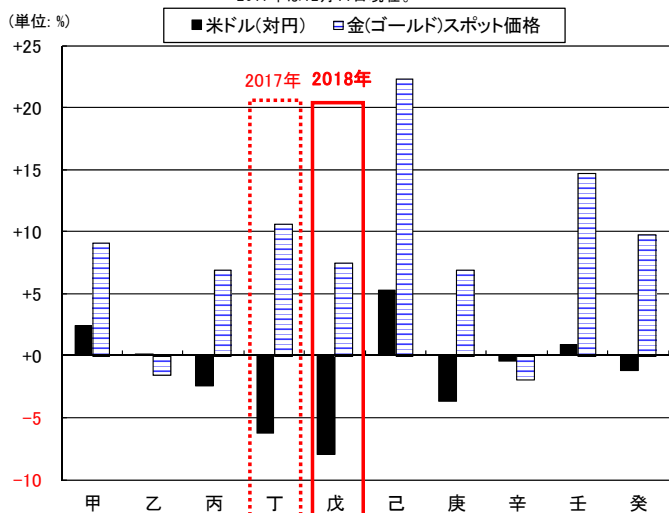


(出所:ブルームバーグより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

## 米ドル・金は平均的に十干も十二支もドル安・金高騰

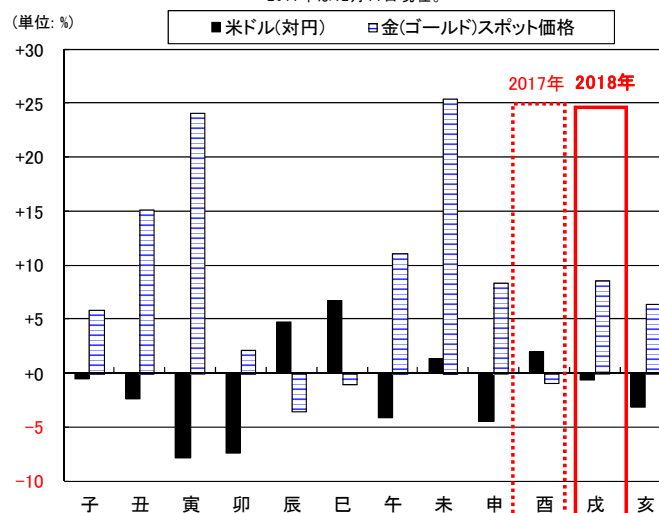
次に、米ドル・金を見る。米ドル・金の2018年の干支は日米株と同様、十干と十二支で同様の結果となった。十干「戌(つちのえ)」でも十二支の「戌(いぬ)」でも、平均的にドル安・金高騰だった。十干で見た米ドル安は2016年の「丙(ひのえ)」から続くもので、「戌」は大幅なドル安だった。

十干と米ドル・金の年間騰落率の過去6回平均  
\*2017年は12月11日現在。



(出所:ブルームバーグより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

十二支と米ドル・金の年間騰落率の過去5回平均  
\*2017年は12月11日現在。



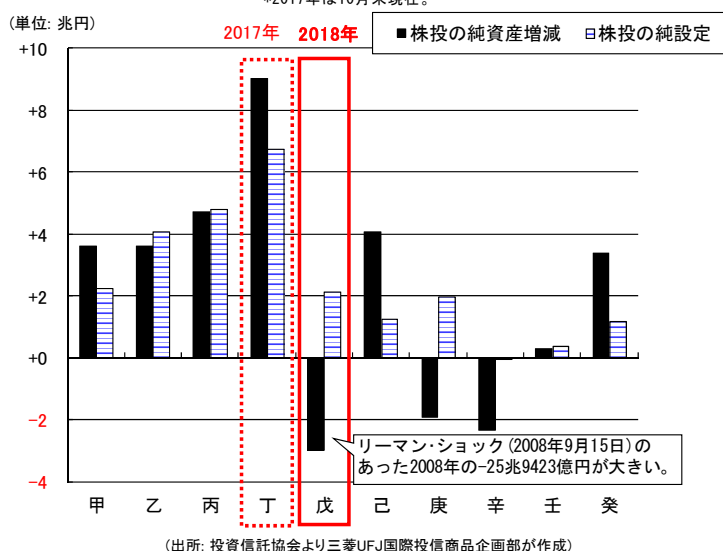
(出所:ブルームバーグより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

ちなみに、十干の「己(つちのと)」や十二支の「未(ひつじ)」は、大きな金高騰となっているが、これは1979年に第二次石油危機(イラン=イスラム革命でイラン産原油輸出途絶)や旧ソ連のアフغانستان軍事介入などが起こり+127%となった事がほとんどである。

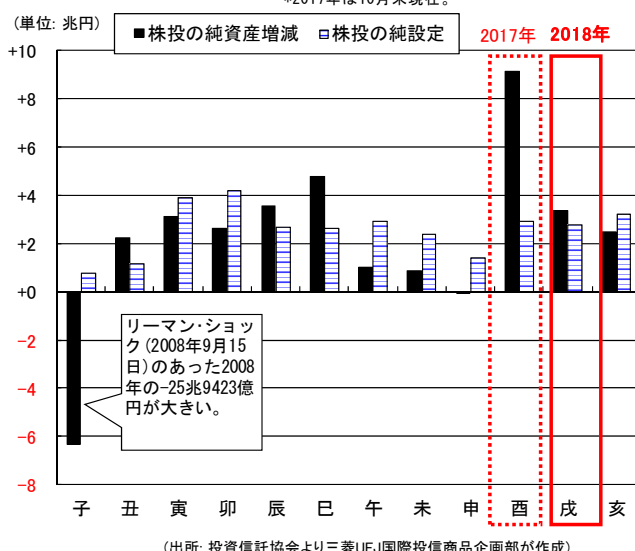
## 株投は十干では約3兆円の純資産減(最大)、2.1兆円の純流入、 十二支では3.4兆円の純資産増で2.8兆円の純流入

日本の国内公募株式投信(株投)も見る。株投の純資産は、十干と十二支で反対の結果となった。2018年の十干「戊(つちのえ)」は、平均-2兆9849億円の純資産減という、十二支で最大の純資産減の年だった。一方、十二支の「戌(いぬ)」は、平均+3兆3614億円の純資産増(4番目)だった。十干で最大の純資産減だが、これは前回の「戊」2008年に、リーマン・ショック(9月15日)が起こり、TOPIXは通年で-41.8%となり、-25兆9423億円と言う過去最大の減少だったことが大きい(公表データのある1965年からの52年間)。過去2番目に減少額の大きかったのは1990年で、TOPIX-39.8%となり、-10兆4772億円だったので、2008年(約-26兆円)は、その2.5倍もの大きさである。

十干と日本の国内公募株式投信の純資産増減と純設定の過去5回平均  
\*2017年は10月末現在。



十二支と日本の国内公募株式投信の純資産増減と純設定の過去4回平均  
\*2017年は10月末現在。



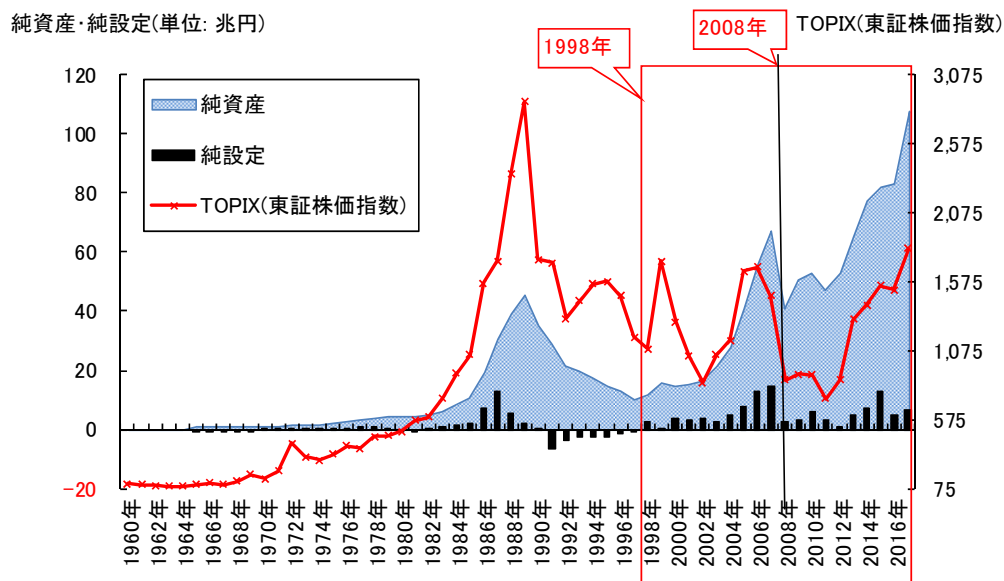
資金純流入を見ると、2018年の干支は、十干でも十二支でも、純流入だった。十干の「戊(つちのえ)」は、平均+2兆1385億円の純流入(十干の中で5番目)、十二支の「戌(いぬ)」は平均+2兆7873億円の純流入(十二支の中で6番目)だった。

株投は、前々回の「戊」である1998年に8年ぶり純流入に転換、2017年まで20年連続で純流入となっている(2017年は12月11日時点で発表されている10月まで計+6兆5419億円)。この間、純資産が26兆円という過去最大規模で減少した2008年さえ、+2兆3753億円の純流入だった。20年連続の資金純流入が始まった年、1998年と言うと、TOPIXが通年で-7.49%となっているが、8月にロシア危機、10月19日には米大手ヘッジファンドLTCM破綻があった年である。だが、投資信託関連で1998年と言うと、金融システム改革法の施行により12月1日から銀行・生命保険会社等による投信窓販が開始、投資信託法の改正により、運用の外部委託等が可能となるなど、販売や商品の多様化に向けた環境が整備された年であった。それまで証券会社でしか購入できなかった投信が銀行等で販売されて投信や投信を通じた資産形成に関して裾野が広がることが期待された。

日本籍の国内株式投信の純資産と純設定とTOPIX(東証株価指数)の推移

(1960年～2017年\*10月まで、年次データ)

\*国内株式投信…単位型及び追加型投信(公募)。



(出所:投資信託協会及びブルームバーグより三菱UFJ国際投信商品企画部が作成)

十二支で、過去4回の「戌(いぬ)」は1994年を除く3回が純流入だった(\*4回とも純流入だったのは5年ある)。純流入だった3回いずれも、翌年も純流入で加速していた。唯一、純流出だった1994年は、1991年から1997年まで7年間続いた純流出期間の真ん中で、純流出額は翌年1995年に増加していた。十二支では翌年へと流れを継続(加速)していく動きとなっている。

以上、判断が難しいかもしれない。2018年は格言通り、「笑い(上昇)」年となり、上昇相場が続く可能性もあれば、「明暗が分かれやすい年になる」(2017年12月19日付週刊エコノミスト)可能性もある。「株高が続くか悩ましい局面にある。欧米の証券会社や運用会社の見通しでは『ボラティリティー(値動きの大きさ)が高まる』『リターンは小幅』といった分析が多い。景気の加速と低金利が共存した今年のような相場が続くと過信すると痛い目に遭いかねない。」(2017年12月12日付日本経済新聞～URLは後述[参考ホームページ]④)とも言われている。その中で、2018年早々始まるつみたてNISA等を利用して、長期積立投資を行っていくことも良い投資方法となりそうではある。積立投資のリターン/リスクを、20年にわたる長期で検証した2017年10月23日付日本版ISAの道その201もご参照(URLは後述[参考ホームページ]⑤参照)。以上の事などをしっかり考え、冷静な対応をしていきたいものである。

以上

[参考ホームページ]

①2017年12月5日付日経QUICKニュース「「いぬ笑う」で来年も株高か 平均上昇率は9.8%」…

「<http://www.quick.co.jp/6/article/13102>」、2017年12月8日付日本証券新聞「2018年展望」続々ー2万5000円台目標が主流ー戌笑う年の相場テーマは…ーPER上昇なら「3万円」…「<http://www.nsjournal.jp/>」、

②2017年12月19日付週刊エコノミスト「特集:戌も笑う投資テーマ2018 戌年は戦後4勝1敗＝編集部」…

「<https://www.weekly-economist.com/20171219contents/>」、

③2017年12月5日付ブルームバーグ「2018年はボラティリティー上昇、株式リターン損なう恐れ」…

「 <https://www.bloomberg.co.jp/> 」、

④2017年12月12日付日本経済新聞夕刊「来年の干支「いぬ」小笑い? (マネー底流潮流)」…

「 <https://www.nikkei.com/article/DGKKZ024522170S7A211CIENK000/> 」、

⑤2017年10月23日付日本版ISAの道 その201「約21年ぶりの日本株高の中での積立投資はどうか?『つみたてNISA』で使われる積立投資を多様な地域・資産・期間で検証!」…「 [https://www.am.mufg.jp/text/oshirase\\_171023.pdf](https://www.am.mufg.jp/text/oshirase_171023.pdf) 」。

三菱UFJ国際投信【投信調査コラム】日本版ISAの道 バックナンバー…「 <https://www.am.mufg.jp/market/report/investigate.html> 」。

## 本資料に関してご留意頂きたい事項

- 当資料は日本版ISA(少額投資非課税制度、愛称「NISA/ニーサ」)に関する考え方や情報提供を目的として、三菱UFJ国際投信が作成したものです。当資料は投資勧誘を目的とするものではありません。
- 当資料中の運用実績等に関するグラフ・数値等はあくまでも過去の実績であり、将来の運用成果を示唆あるいは保証するものではありません。また、税金、手数料等を考慮していませんので、投資者の皆様の実質的な投資成果を示すものではありません。市況の変動等により、方針通りの運用が行われない場合もあります。
- 当資料の内容は作成時点のものであり、将来予告なく変更されることがあります。
- 当資料は信頼できると判断した情報等に基づき作成しておりますが、その正確性・完全性等を保証するものではありません。
- 当資料に示す意見等は、特に断りのない限り当資料作成日現在の筆者の見解です。
- 投資信託は、預金等や保険契約とは異なり、預金保険機構、保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。
- 投資信託は値動きのある有価証券を投資対象としているため、当該資産の価格変動や為替相場の変動等により基準価額は変動します。従って投資元本が保証されているわけではなく、基準価額の下落により損失を被り、投資元本を割り込むことがあります。
- 投資信託は、販売会社がお申込みの取扱いを行い委託会社が運用を行います。
- 投資信託をご購入の場合は、販売会社よりお渡しする最新の投資信託説明書(交付目論見書)の内容を必ずご確認ください。
- クローズド期間のある投資信託は、クローズド期間中は換金の請求を受け付けることができませんのでご注意ください。
- 投資信託は、ご購入時・保有時・ご換金時に手数料等の費用をご負担いただく場合があります。

### 本資料中で使用している指数について

- ・東証株価指数(TOPIX)に関する知的財産権その他一切の権利は東京証券取引所に帰属します。